

聖句

吾が命は吾が命にあらず
如来より与えられたる命なり

土屋觀道

眞生

第 77 卷 471 号

<http://canchiin.net>

平成30年7月15日
1・4・7・10月15日発行
【発行所】
真生同盟本部
〒105-0011
東京都港区芝公園
2-2-13観智院
【振替】
00160-6-80674
【電話】
03(3431)1450
【Email】
shinsei@canchiin.net
【編集兼発行人】
土屋正道
会費 年額 2,000円
一部 100円



奈良 興福寺 維摩居士



光道上人名号石建立発願

正道

このたび、光道上人の名号石建立を発願し、8月5日に除幕、開眼いたします。眞生碑文石に正対する形で建立し、碑文を拝読していた光道上人の姿を顕彰いたしました。これに合わせて苔や樹液で経年変化した頌徳碑・碑文石も洗浄することにいたしました。

諏訪唐沢山阿弥陀寺の眞生同盟
頌徳碑は、本年五十回忌を迎えた
先師觀道上人遷化の翌年、昭和四十五年七月に建立されました。
爾来毎年、唐沢山修養会にて二代
主幹光道上人が法要導師を務め、
たが、師父の姿や声が蘇り涙がこぼれました。

先師觀道上人が残された特徴の
益三氏)を拝読してまいりました。
去年、光道上人の分骨を「佛塔」
に納骨して私が碑文を拝読しまし
たが、師父の姿や声が蘇り涙がこ
れています。

光道上人に「ぜひ南無阿弥陀仏と書いておいてください」となんども申しましたが、「手が震えて、もう書けない」と仰つて残念ながら觀智院・眞生同盟本部には、光道上人の「南無阿弥陀仏」の軸は残されていません。若い時からガリ版刷りや原稿などでたくさんの文字を書き、墨書も上手だったのに残念に思っています。

かつて光道上人の名号石を落慶



に合わせて建立してくださった神奈川県二宮法然寺さま。昨年6月後を継がれた稗貫光遠上人と、たまたま周防大島西蓮寺の藤本淨彦上人の念佛研修会で同室となり、名号を撮影させて欲しいとお願ひしました。それから2週間後、光道上人は急逝されたのでした。後日、あまりのタイミングに「如来様のおはからいだつたのでは?」と二人で話しました。

結局、法然寺さまを訪問できたのは12月18日でした。その時、名号石の写真を頂きました。稗貫公夫上人、長女恵理さん、光道悦子夫妻が写っています。

名号石建立を思い立つたのは、
昨年二百回忌を迎えた徳本行者の
名号石が全国に一五〇〇基以上残
されていると聞いたことが機縁に
なりました。お弟子や信者が建て
た名号石が二百年の時を超えて現
在の私たちに「南無阿弥陀仏」を
伝えてくださっています。

た徳本行者の額には、
「後の時代に生まれてくる方々が、
自らの心身を映す鏡として、名
号を残します。
南無阿弥陀仏を
自らを振り返ることを教える先
生と思つて見てください」
と書かれています。阿弥陀寺には、
磨崖に掘られた巨大な名号も残つ
ています。石屋さんに聞きますと
当時どのようにして掘ったのかわ
からない、と言われます。
私たち遠からず人間の命を閉
じてこの世から去りますが、「南
無阿弥陀仏」は残ります。そう思
うと「上手に越したことはないが、
下手でもいいから、名号を残さな
くては」と思うようになります。
後の世の人のために「南無阿弥
陀仏」を残す努力を続けてまいり
たいと思います。

「後の時代に生まれてくる方が
自らの心身を映す鏡として、名
号を残します。

私たちには遠からず人間の命を閉じてこの世から去りますが、「南無阿弥陀仏」は残ります。そう思うと「上手に越したことはないが、下手でもいいから、名号を残さなくては」と思うようになりました。

後の世の人のために「南無阿弥陀仏」を残す努力を続けてまいりたいと思います。

華嚴見佛

華開いて佛を見たてまつる

カメラマンの田中さんに、光道上人の墨跡はもちろん、名号石もデジタルで立体像が作れるようにあらゆる方向から撮影をお願いしました。二十一世紀の私たちが後世に残す「南無阿弥陀仏」はどのような形が可能なのか?を考えています。

世に残す「南無阿彌陀仏」はどのような形が可能なのか?を考えていきたいと思います。

南無阿彌陀仏

知識とぞ見上

唐沢山阿弥陀寺本堂に掲げられ

眞向同盟二代主幹 観智院第二十二世 多聞院第三世
智德心院青蓮社紅譽念阿華開見佛光道大和尚
平成二十九年六月二十六日 世寿九十歲

土屋光道上人

上屋光道上人は昭和三年東京に贈上山寺内多聞室現多聞院に土屋親道上人美和夫妻の長男として生を受け幼少より興味開拓山脈修養会に参加師父親道上人中野善徳の教説を受ける。第二次世界大戦後東京大学に宗教学を修め研究室助手を務める所を嘱託する。昭和四五年初代主幹親道上人による眞生同盟士務を築いた。学識は佛敎にござらず世界の宗教文化の研究にて博士号を取得した。また大正大学修道院講師にして二十一年の長きにわたり実践佛教を指導アカルマ院にて三泊四日の別時金佛像仰奉表の機会を得た。平成元年宗教師として指す百四十名を越える。上人の別時金佛像は熱意が笑を結び、平成元年阿弥陀院は全世界に延びず四年で復興。大本山善光寺本願大師の復興委員会と連携し本尊移設全団慶祝式を執り了。勅賜錦糸表文頒下、中村康隆院下、復興委員会と連携し本尊移設全団慶祝式を執り了。勅賜錦糸表文頒下、中村康隆院下、第一參詣光台下の名号を乞ひ志を立てる。上人の一周忌にちやみ名号石を建立し教子を安けた信者念佛道場等志を合わせ誕生日開門のさらなる發展を祈念す。南無阿弥陀佛

眞実の宗教

(『宗教と人生』より)

土屋

觀道 上人(眞生同盟初代主幹)

念佛三昧

昔から、一事に優れた人々はいつもその事に没頭しています。総ての妙味はこの没頭にある。この意味から云えば念佛三昧もまたこの没頭の生活であります。

念佛三昧とは南無阿弥陀仏に切り切ることである。仏と自分とが一つになることがあります。宇宙のミオヤに私共が救いとられることがあります。言いかえれば信仰の対象たる絶対のミオヤに自己の全身を没頭することだと云つてもよい。この身と心とのすべてを救いのミオヤに任せきることであります。

法然上人の専修念佛と云うのがそれであります。これは救いの人などもありますが、そん

親たる阿弥陀仏に、南無し切った姿であります。

一つの稽古にしましても、反つて片輪の人などに上達する人が多いのは、その求むるところに全身を没頭することが強いからであります。念佛もその通りであって、

反つて自由のきく人よりも、非常に困つたと云うような、不自由の人には本當の深い信仰を得る人が多いのも、やはりこの求むる心が深いからであります。

とにかく、念佛の一行には南無乳房を含み、母親の慈顔を深く見入つてにつこりとした様なものであります。私共は理屈だけでは満足が得られるものではありません。

「ほんとうにそうだなあ」と心から納得のできる、そうした心で御仏にお念佛できればよいのであります。そこには一切の理屈を離れた、一つの事実が全心如来に南無

人の見仏は決して本当の見仏ではありません。單なる一種の妄想が

眞実の生活

幻影となつて現れたに過ぎません。本当の見仏とは正しき念佛の上にのみ現われたるものであります。したがつて单なる見仏、それは単なる妄想の幻影化に過ぎません。本当の見仏は如來と自分とが、口先や理屈だけではいけません。それは真に任せずにはいられない生活にまでならねばなりません。真に如來に任せた生活は、母

親に任せた赤子のような安泰な世界もあります。したがつて如來に南無し切つた生活、それは全く安見仏の境地であります。如來の慈悲光、宇宙の絶対に融け入つた心境は、あたかも赤子が無心に母親の

お経にも「仏心は大慈悲これなり」と云われてあるが、その心は悔い改めなければ許さないと云うあります。私共は理屈だけでは満足が得られるものではありません。それどころか、自ら悔い改むることもできなければ、またその改めの道も知らない愚鈍なものまでも、救わざにはおけぬと云うのが、仏の心であります。

だから私共が、健康を害した時にも、苦しい息の下から出る念佛は、驚くべきものがあります。信

世には「お任せ、お任せ」と口癖のように云う人がありますが、口先や理屈だけではいけません。それは真に任せすにはいられない生活にまでならねばなりません。真に如來に任せた生活は、母親に任せた赤子のような安泰な世界もあります。したがつて如來に南無し切つた生活、それは全く安住の生活であります。生死も任せた生活である。

仰のない人は唯煩悶の外はない。まして死の間際において、一層それは甚だしいのであります。しかも一つの健康でも、これを深く反省すれば、それがそのまま如来の恩寵でありまして、自分の力でそれを得たと思うのは大きな誤りであります。

静かに宇宙の現状を考察すれば、一として、天地の大道によらぬも

はない。一切がそのまま如来の慈光によると云つてもよい。しかもその中にあって、無限の真理を追求していくのが、真実の生活であります。真実の理想は一つの信仰となって、初めてその人を動かすのである。そこにはそれによらなければこの外に生きる道がないと云うものになつて來るのであります。

ではない。俺の後を嗣ぐ人ではな次第にやりとりの声が高くなつて、深更にまで及び、家人にたしなめられることがありました。私も父に似て声も大きく、仲々頑固で理屈っぽいし、云い出したら人に負けることが嫌い、脇で聞いたら、きっと果ては、親子喧嘩の云い合いに聞こえたかもしれません。

大切な信仰のことですから、から父親だからと譲つて自説を引

とは云いません。そこで、時には、と開き直つて、頭ごなしに云う。今から思うと、私も若かつたし、父も病氣で身体はつらいし、己が出家の本懐にてらし、伝道も出来ず、精神的にも、道を憂い、家族の不信仰や不甲斐ない会員の現状を思うと、ことごとく自分の不徳を思ひます。しかし、当時の私は、

聴聞の態度（一）

土屋 光道 上人（眞生同盟二代主幹）

数年前、まだ父が元気な頃、私はよく信仰上のことで質問することがありました。勿論、仏法を知りたい、より真実でありたいという気持ちからのことであります。その際、父の意見になるほどと素直に納得出来る時もありましたが、時には、どうしても理解出来ぬ、矛盾というより、返つて意見が対立することが度々ありました。中

でも、もう少し、信者に対しても、もう少し、信者に對して上からやつつけずに、やさしく相手を引揚げてやるような説き方をしたりどうかという点と、いつも同じ話ばかりが繰り返されて、なんだ又あの話しかと人は思うから、折角例会や大会に来た方には、もう少し話の内容を工夫して欲しい

「よし、そんなら出て行つてやるぞ、そんな権威を振舞したり、人をおどかして、従わせようなど、何で聞けるものか、大体そんなワンマンな態度をとるから、信者もなつかないし、たとえ、なついて、折角よい質問をしても、相手へ同情し理解してやればこそ、頭からやつつけるような態度をとるから、その伸びようとするよい芽をつまれるようで皆恐れて一度と聞く気にならず遠ざかってしまう。俺

のですが、父は決して「そうだ」 「もうお前なぞ出て行け——」「そんな奴は、この寺に住む資格

がいなくて一番困るのは父ではないか、よし一つ俺が出てやつ

て、少々思い知らせてやる方が、反つて親孝行だ……」

と、今から思うと、とんでもない考え方を正直のところ持つたこともありました。

そんな私に、火に油を注ぐのは、

旗色が悪くなると、

「近頃のお前の毎日の生活はどうだ――」

「一体お前の不勉強はどうだ――」

と、只今現在している議論とは全く関係のない問題、しかも、私の一番痛い弱味を引合いに出して、改めて来ることになりました。

「そんな個人攻撃に問題をすらしきづるい、そういう最近のお父さんだつて――じゃないですか」

という具合で、もうお互に真実を求める論議からはずれてしまうのです。

「大体、こんなワンマンだから、人に理解されないんだ、昔から宗教家に限らず、偉い人はみん

なワンマンで、その家族が一番たものがあつたことを懐しく思い出します。

被害者だ――

と、皆さんから見ると、きっと笑われるか、あきれられるようなことを悩んだこともありました。

さて、最近の父は、年齢と共に、とても円満になつたというか、やさしくなつて、

「お前、大変だなあ――」とか、

「身体に気をつけなさいよ、忙しい忙しいで、大事な生命を無駄にしないようにな――」

「本当によくやつて呉れるよ――」

と云つて、滅多に小言を云わなくなりました。私も、当時にくらべ、大人にもなり、二児の親となつて、子を持つて知る親の心と申しますか、以前のようなことは絶えてな

くなりました。

しかし、その反面、父も年老いて、父が

あの元気がなくなつたなあ、と淋しくも思い、親不孝も気づかずによつかりあつたあの頃、激しくぶつかりあう魂と魂の火花の中

に、やっぱり教えられ、鍛えられ

ひつかかって残つたのを覚えてい

ます。

激しい談論、喧嘩もたまにはよい。その内容や仕方の良し悪しは考えねはならぬが、真実を求めて、お互いの裸の心と心が本気でブツカルのはよいことです。少く

も、いつも相手の意見を尊重する

と云いながら、その実少しもお互に真剣に心がブツカリ合わぬのでは、本当の精神的な成長も和合もない気が致します。夫婦も、親

子も、兄弟も、芸人も、一度も喧嘩しないということは、返つてい

このことは、親子という私ひとりの事でなく、師に対して真実を

つまでもその人間関係が他人で薄く冷たい場合が多いのではないか

求め、聴聞するあるべき基本的な態度として、すべての人が、考

えてみなければならない問題のよう

に思えるのです。

端的に云つて、私をはじめ今日の日本人全体が、一応、法を求めているようでその実、真実を聴聞する正しい態度を失つてはいな

かということです。

最近の家庭や学校で一番気がつ

くことは、親と子供、先生と生徒の間柄が昔に比べて非常に変ったことです。民主主義のおかげか、親子も、師弟もまるで対等の仲良い友達のような口をきくし、相互の話し合いの光景がみえます。昔のような上下の関係、目上の構成に対する下のものの謙譲や、礼儀というものはなくなりました。昔に比べてそのよい面も充分評価しなくてはいけませんが、同時にそこによい意味での親子や師弟の関係が失われ、また、よい意味での尊敬と真実探求の厳しさが薄れたことを、この際はつきりと自覚しなければならぬと思います。自由をはじめとする諸権利、或は真実に対して、自己自身を厳しく律する、その厳しい、謙虚な態度を、自分自らが身を以って示し、それを自分の子供、弟子に求め、教えねばなりますまい。

最近の若い青年は第一に自分の欲しものは欲しい、嫌なものは嫌いという、誰の前でもものおじし

ない、まつ先に自分を先にし大切
にする性格を身につけている。そ
の一方、現代の子は決して高望み
をしない、昔のような高まいな理
想に情熱を燃やし、眞実を求めて
悶々とする青年は全く見あたりま
せん。そのあざやかな現実的な割
りきり方にびっくりします。こう
した特徴の原因は、現代の巨大な
社会に疎外された人間性の自衛手
段ともあきらめとも考えられま
しょうが、眞理というもの、法と
いうものを求める熱誠、厳しい求
道の態度そのものが、彼等を指導
すべき今日の大人達に見失われて
しまっているからではないでしょ
うか。

「うやまつて大衆にもうす」心に
対し「うやまい奉つて真理を聞か
せていただく」その合掌の心が、
その核心にあらねばと思います。
少くも、数年前の父の眼に、當時
の私の姿の中にそれが見出せな
かつたのは確かだつたのです。そ
して、今でも時々それを忘れてし
まうことが多いのはお恥しい次第
です。

人間は死なぬ
（『人生戦場』より）

中野 善英 上人

「うやまつて大衆にもうす」心に對し「うやまい奉つて真理を聞かせていただく」その合掌の心が、その核心にあらねばと思います。少くも、数年前の父の眼に、当時の私の姿の中にそれが見出せなかつたのは確かだつたのです。そして、今でも時々それを忘れてしまふことが多いのはお恥しい次第です。

(次号へ続く)

(一九六六年十月)

人間は死なぬ

『人生戦場』より

中野 善英 上人

人間は死ぬものではないのです。嘗つて多くの人々が一人のキリストを十字架にかけて殺そうとした。そして殺して了つたと思った。然し、豈図らんや、その殺そとした人々の心の中に、キリストは

甦つて來たのです。そしてその殺した人々の子孫にまで数千年をかけて、ますます甦つて來ているのです。そして将来もますます甦つてゆくことでしょう。

殺した筈のキリストが、今何億万の人々魂の中に活きているのです。遂に世界は、一人のキリストを殺すことが出来ず、却つて全世界が一人のキリストの為めに生かされているのです。

ている者には、弁榮上人はわからぬのです。死なれた弁榮上人を追善するのでなく、括きて居られるのであります。弁榮上人を、今ココにまつるのであってこそ、故上人に本当に仕えるものであると思ひます。

弁榮上人も「人間は死なぬ」ものであることを教えて下さいました。石川五右衛門も、人間は死ぬものであることを教えて呉れました。又キリストも、人間が死なぬ者であることの教へて呉れました。この教えによつて、亦自分が、「死なぬ人間」になることが、キリストを活かし、弁榮上人を生かし、総てのものを活かして行くことだと思います。

「死なぬ人間」とは何か、

「なさねばならぬ」如來の使命を感じて、沢庵漬け一つも切り、人の荷車一つも押さずに居れぬ人のことを云うのです。下駄一つ揃えるのも便所の肥一つ汲み出すのも「せずに居れぬ」力に充たされて、喜び勇んで押し切つてゆ

くとき、している自分が不滅でないでしようか。そりや時には人に迷惑になることもあるでしょう。社会に悪だと認められる事もあるかも知らぬ。而し本当に正しい宇宙の大道によつて、自分が「なされて」行く時には、必らず後になって「良い事であった」と悦んで貰えるであらうと思います。いや、そのなしてゐる現在でも、実は最善であるのです。仮令、社会は一時これを誤解し、人は一時これを怨むとも、社会の為にも、自分の為にも、永遠に最善である「道」を行いたいのです。それが自己を不滅にし、如來をしてますます不滅ならしめ、そのお慈悲の光りを輝かしめるものだと思います。

弁榮上人は自ら、そう云う「不滅の道」を、人に笑われながら、人から誤解せられながら行つて、現実に如來さまの生きていられることを、身を以つて示されました。私達も亦、この弁榮上人の教えによつて、自分達のような者でも、

第二十六回

一千札拝行参加者

平成三十年二月十七日(土)

市川市	品川区	横浜市	海老名市	中村春美
北野昌子	松戸市	早水孝道	山根健太	佐藤秀哉
坂田孝一	港北区	横浜市	横浜市	加藤秀哉
服部道子	本区	中区	中区	土屋由恵
田中昌子	港北区	港北区	港北区	佐々木幹隆
北野健太	北野区	北野区	北野区	土屋法道
坂田孝一	品川区	品川区	品川区	中村春美
服部道子	横浜市	横浜市	横浜市	佐藤秀哉



春彼岸法要

観道上人五十回忌法要

観智院開創四三〇年法要

平成三十年三月十八日(日)

表白

法身、報身、應身 生みのみ親、
育てのみ親、教えのみ親でいらっしゃる三身即一の阿弥陀如来さま
本日 観智院御本尊 大悲眞生阿弥陀佛のみ前において

法身、報身、應身 生みのみ親、
育てのみ親、教えのみ親でいらっしゃる三身即一の阿弥陀如来さま
本日 観智院御本尊 大悲眞生阿弥陀佛のみ前において

観智院開創四三〇年記念法要 ならびに 第二世上屋観道上人

大信光院法蓮社性譽上人念阿自然

觀道大和尚 五〇回忌法要を厳修いたします

観智院は、天正十五年(一五八八年)徹公上人が武藏国箕田に(埼玉県鴻巣市?)、一説に日比谷の地)一院を結び誠諦庵と号すことになります。慶長三年(一五九八年)増上寺第一世存応上人の時、徳川家康の命により増上寺は

徳川家の菩提寺として貝塚(現在の千代田区平河町)より芝に移る。

この時 徹公上人の後を継いだ吟察上人は増上寺存応上人に深く帰依し誠諦庵は増上寺第一の子院となる。後に家康の計らいで朝廷より普光観智国師の号を授かつた存応上人は、退職のち誠諦庵を隠棲の地と定め名を普光院と改められる。さらに享保の初めに(享保年間一七一六~一七三六)演譽大僧正の命により観智完と改め今日に至る。増上寺塔頭として法務にあたる一方、田安家、松平家など大名の宿坊となる(忠臣蔵のモデルとなる)さらに寛永二年(一六二五)産千代稻荷を勧請し安産福德の神を祀った。爾来四三〇年大震災、戦火により打撃を受けながらも念佛興隆の拠点として存続をしています。ここに観智院開山上人中興上人歴代諸上人 寺族檀信徒眞生同盟会員各家先祖代々 有縁の諸精靈位に掌を合わせ真心込めて報恩謝徳の誠を捧げ、さらなる発展を祈念いたします。

観智院開創四三〇年報恩謝徳如來大慈悲哀愍護念 同称十念



土屋観道上人は、明治二〇年(一八八七年)に佐賀県に(三養基郡北茂安村)生まれる。人生問題特に死について深く悩まれ、二歳の時南西の天空より稻妻のごとき光明全身を包み、忽然として難く、周囲の反対を押し切り宗教大学に入学、中島觀琇上人(後に子となる)伝通院にて浄土宗宗戒(光明会始祖)を訪ね愛顧を受ける。大正五年(一九一六)觀琇上人の許しを受け弁榮上人を芝山内学寮多聞室に招き起居を共にして観琇上人も移り住み表札「聖者の家」を掲げて念佛道場を開設全国に念佛伝道。弁榮上人の朝鮮満州伝道旅行にも随行した。やがて塩沢美和と結婚弁榮上人遷化後、大正二一年(一九二二)光明主義を受け継ぎ、仏の子の自覚に立つて真実の道に生きる「眞生」、如來中心主義を掲げて眞生運動を展開した。各地に布教伝道しやがて全国に三〇支部を数える念佛のネットワーク「眞生同盟」が組織された。

二一世に晋山眞生同盟本部道場を置き毎年二回の本部大会を開催。

昭和二〇年（一九四五）空襲にて

觀智院・多聞院全焼 一家は柏崎

に疎開。戦後、觀智院・多聞院を

再建し伝道を再開する。昭和三八

年觀智院眞生同盟本部道場を落慶、

爾来毎年本部大会を開催する。昭

和四四年（一九六九）二月一九日

信者の念佛唱和の中 正念佛生を

遂げられた。増上寺椎尾弁匡大僧

正により葬儀が厳修され、本山院

家に列せられ正僧正を贈られる。

ここ念佛回向し感謝を申し上げま

す。觀智院第二一世 土屋觀道上

人

大信光院法蓮社性譽上人

念阿自然觀道大和尚第五〇回忌

莊嚴淨土報恩謝德

同称十念

平成三〇年（二〇一八）三月一八

春彼岸

日

觀智院二三世 眞生同盟主幹

信譽正幹

春彼岸会参加者

（各家代表者）

平成三十年三月十八日（日）

東京 土屋正道 谷口英夫 黒田敏広

矢野俊治 北野昌子 黑田根俊枝

近藤富士子 大橋英和

矢野清一 堀雅美

北野耕子 関根明智

大橋成明 佐藤俊枝

近藤成明 タイ子

矢野英和 佐藤晶子

近藤千葉 関根長野

矢野千葉 関根吉

近藤千葉 関根耳雅

矢野千葉 関根由美

近藤千葉 関根由哲

近藤千葉 関根由貴

近藤千葉 関根道也

近藤千葉 関根道也

近藤千葉 関根道也

近藤千葉 関根道也

近藤千葉 関根道也

近藤千葉 関根道也

長野 長野

東京 東京

福田 福田

佐藤 佐藤

堀雅美

関根関根

黒田黒田

谷口谷口

黒田黒田

谷口谷口

黒田黒田

福田 福田

土屋 土屋

由貴 由貴

佐藤 佐藤

関根 関根

黒田 黒田

谷口 谷口

黒田 黒田

松禅院念佛会

中野善英

上人追善

北風光英

上人十三回忌

諸澤立道

中村典幸

中村正俊

中村道

中村勲

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道

平成三十年四月十四日（土）

（十五日（日）

滋賀

東京

眞生

上人追善

北風光英

上人十三回忌

諸澤立道

中村典幸

中村正俊

中村道

中村勲

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道

中村道



5月12~13日 第13回24時間不断念仏会 増上寺 光摶殿 大広間

◆二十三時

ヨーロッパ仏教センター
(フランス)

高僧光隆上人

五月十三日(日)

◆四時

ハワイ淨土別院(ハワイ)

檀柴祐文上人

◆五時

イビウーナ日伯寺(ブラジル)

櫻井聰祐上人

◆六時

クリチバ日伯寺(ブラジル)

大江田晃義上人

◆八時

長昌寺(大分)

今井英之上人

◆九時

念佛行脚

◆十時

觀智院(東京)

◆十一時

志明之家(台湾)

黄莉瑛氏

柏崎念佛修養会参加者

平成三十年五月二十五日(金)
(二十七日(日))

参加者

新潟

東京

土屋正道

千葉服部道子

諸澤正俊

岡村明子

高橋教正

勝郎



☆秋彼岸会・平成30年災害・事変物故者追善回向 ご案内

日 時 平成30年9月22日(土) 午前9時30分受付
行 事 ◇別時念仏 午前10時～ 本堂
法 話 觀智院所属 福田哲也
◇彼岸法要 午前11時～ 本堂
○食事の用意はありません。お墓参りは法要後にお願い致します。

お塔婆回向

事前にお申込の檀信徒、および参詣の眞生会員の方々は、「□□家先祖代々秋彼岸会追善供養 施主○○○○」の塔婆をおあげします。
これ以外に、特にお彼岸に塔婆回向をご希望の方は、お戒名と施主名を記してお申込み下さい。
観智院墓地にお墓がない方は、ご本尊前で祈願し、共同墓所にお供えします。
◇お塔婆回向 寅加料 一基につき3,000円以上

☆京都の中心で、仏の名を称える 第7回 24時間不断念仏会

日 時 9月29日(土) 13:00～30日(日) 13:00
会 場 浄土宗大本山清淨華院
(京都市上京区寺町通広小路上ル北野辺町395 京都御所東側 寺町通り沿い)
会 費 5,000円 但し、ショート参加(概ね2時間まで) ワンコイン
灯 籠 ご志納2,000円(ミニ灯籠500円は当日申込み)
持 物 懐中電灯、雨具、防寒具(明け方が冷えます)
申込先 24時間不断念仏会 事務局
〒105-0011 東京都港区芝公園2-2-13
FAX 03-3431-7807 本行事特設 E-mail nenbutsu24@hotmail.co.jp

比叡山松禪院仲秋念仏大会

南無阿弥陀仏 先師中野善英上人が真生一味大念佛を唱道され、御遷化されてより52年。仲秋の名月を拝して念佛、今までの自分を葬り新たな人生の出発を祈念して、発願・修行・結願の仲秋大会を開催いたします。道友一同力を合わせて念佛の法灯遵守、更なる念佛精進を誓願いたします。ぜひ大会にご参集くださいますようお願い申し上げます。合掌

松禪院念佛会世話人一同

日 時：8月25日 発願日(土) 13:00受付
開白、念佛法話、樹下石上徹宵念佛
8月26日 修行日(日) ご来光念佛
念佛法話、「仏塔」前 草上念佛、写経
8月27日 結願日(月) ご来光念佛、誓願淨書
「仏塔」淨書奉納 清掃 ~12:00
道 場：比叡山飯室谷 松禪院 0775-79-4840(会期中)
JR比叡山坂本駅よりタクシー20分
(不動堂の左奥)
会 費：1泊 3,000円 日帰り1,000円
懇親会：27日 13:00～
持 物：雨具、防寒具
申込締切：8月18日

唐沢山修養会

還り来たれ 聖なる魂の故郷へ
聖名 真剣求道念佛して、積もれる俗塵を
聖淨域に洗いましょう。心よりお待ちして
おります。合掌

日 時：平成30年8月1日(水)
集合 午後2:00～
解散 5日(日) 午前中
導 師：石田孝信上人・土屋正道上人
道 場：唐沢山阿弥陀寺 JR上諏訪駅下車
駅前タクシーにて約10分
電話：0266-52-5269
会 費：4泊5日 32,000円 日帰り5,000円
内 容：念佛、法話、座談、岩屋大念佛
法 要：5日目9:30本堂、10:30より
頌徳碑へ

光道上人の
名号石除幕式を行います

多くの方々から会費納入のご協力をいただきまして
誠にありがとうございます。